

現代：近代小説ゼミ(昭和三十二年度日本文学科ゼミナール紹介)

著者	小原 元助
雑誌名	日本文學誌要
巻	1
ページ	65-65
発行年	1957-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/00018947

報告者に任せ切りで討論もあまり行わず、教授から問題が提出されて討議が行われると云う状態である。このように連体関係がないので作品を断片的に分析しているにすぎない。

近松がいかに悲劇を創造していつたかを、作品の具体的発展を通して明らかにすると云う問題が追求されていないのである。こういう意味で夏期休暇に、ゼミ活発化と発展を期して文集を発行したのである。内容はゼミに対する考えと作品論と近松に関する感想であつた。その中でゼミに対する感想は、報告なり作品分析なりの方法が分らない点が不活発の原因とするのが大多数である。そこで教授に一回作品研究の模範を示してもらう声が出たのであるが、報告形式を固定化せず、諸君独自の方法を持つて新しい問題を見出すのがよからうと云うことで、広末教授の著書「近松序説」を参考にして研究している。だが未だ「近松序説」から脱皮出来ず、私に反論する者がいないと広末教授を歎かしめている現状である。これからの課題は、世話悲劇の成立から到達点迄の過程の追求にあると思う。

現代

芥川ゼミ

小原元助教

作家芥川竜之介の全貌を個々の作品を通して彼の芸術と生活の両面からみつ、まづ初期

の作品「羅生門」「鼻」等から人間のエゴイズムの醜さ、頼りないみじめさについて追求し、傍観者の自己冷笑、自己批判、現実の人生や人間の中に醜いものやわびしい灰色のものしか見出すことが出来なかつた。即ち人間のもつ美しい可能性を信じながらもそこに到達出来ない人間の無力さや虚無感に、不可能の中に住むようになった竜之介。そのような中から芸術至上主義的な世界をつくり、「戯作三昧」等の中にも見られるように自我の解放をも喜び求めた。が、しかし、虚無感と現実の調和的な安住を求めようと「地獄変」「密柑」のような作品の中で人間の温さを求めようとした。が又、そういうものを深く求めようとすれば「秋」「枯野抄」等に見られる現実の暗さ、解放の喜びにさえ、暗い壁、みじめさ、あわれさを感じた。

こうした機智、諧謔諷刺と意識的な変化の妙とを多角的に解剖しながら、今後後期の作品からは乗り切れない壁の前で善悪を超越した美を求め、エゴイズムの追求が、自分自身すら信ずることが出来なくなつた（「河童」）自殺までの過程を、とかく訓詁注釈を軽蔑し、高度の文学理論をふりまわすという傾向から、まず作品を深く、充分に、たくさん読むという基本的な条件から出発し、自治的な研究、討議の交換を、教授と学生の親密を、自分自身の文学的要求と他の研究をつき合わせ

つつ、評価を客観的なものに高めるためにも大いに奮起している。

近代小説ゼミ

小原元助教

五月七日、二葉亭四迷の「浮雲」を初めとして近代日本文学の小説作品を検討、研究している。現在迄次の作品を取り上げて来た。

「浮雲」二葉亭四迷、「厭世詩家と女性」北村透谷、「にぎりえ」「十三夜」樋口一葉、「地獄の花」永井荷風、「火の柱」木下尚江、「破戒」島崎藤村、「蒲団」「田舎教師」田山花袋

これらの作品を文学史の面から見れば、明治維新の変革によつて人間の絶対的平等や独立自尊が唱導され、近代的な理念の誕生した時期にあたる。この期でもっとも大きな問題は人間・自我の確立と云うことである。我々のゼミナールもこの点を強く検討して来た。あいまいな革命であつたため人間個人尊重の近代的理念も主体化されず、そのために苦悩して来た明治の青年達の姿を作品の中から掴み出して検討をしている。

宮本百合子ゼミ

小原元助教

百合子ゼミでは百合子の小説、評論、伝記の全体にわたつて系統的かつ多角的に研究をすすめて、この作家の果した意義について客観的な評価に達するようゼミを行つている。